連載

ふるさと Something NEWS

第㉘回

ふるさとの伝統を守り伝える
――伝統は至高と至然の見本

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp　代表理事　佐藤 建吉

▼伝統は体験から

2020年2月10日、神田明神で開催された『世界に誇る日本の「木の文化・木のおもてなし」を考える』での公開座談会に参加した。パネラーは、涌井史郎氏(造園家、岐阜県立森林文化アカデミー学長)、隈研吾氏(建築家、東大教授)、デービッド・アトキンス氏(日本文化財研究家、小西美術工藝社社長)であった。

各界を代表する三人の発言は大変参考になった。この座談会で、異彩を発したのは、アトキンス氏。イギリス出身ということで、他の二人とは背景が異なる面がある。隈氏も、海外では日本人として異文化のコメントができるだろうが、アトキンス氏は極めてユニークであった。

この行事はインバウンド促進・地方創生・地域材の需要拡大を意図している。インバウンドでは4000万人の観光客を迎える目標で、日本の伝統を観て体験することをPRしている。アトキンス氏はいう。「日本の伝統を、インバウンド客に伝えるのに、日本人は日本の伝統品を使っていますか?日本人が使わないものをガイジンは、使わないし関心を持ちませんよ」と。

筆者は毎月、ドイツ文化センターOAJでの例会に参加しており、南青山1丁目駅からの道のりで、「伝統工芸青山スクエア」(全国伝統的工芸品センター)の前を通る。そこには以前も寄ってみたが、今回はアトキンス氏の言葉に触発されて、何か購入するつもりで店内に入った。入り口近くに、漆器が展示してある。会津塗はじめいくつか見たが、蓋つきのお椀で「川連漆器」のものが気にいった。漆塗りの箸もつけて1万5000円で購入した。

翌日から、早速使い楽しんでいる。インバウンドのガイジンにも、日本の伝統品の良さと価値を、そして文化も語れそうだ。

▶WAZA2020会場風景 @池袋東武

▼伝統的工芸品展

青山スクエアで、東武百貨店池袋店8F催事場で、2月20～25日に、伝統的工芸品展「WAZA2020」のチラシを頂いた。最終日の25日に出かけた。会場には、ふるさと工芸品、織物・装飾品・繊維品、木工品・金工品、陶磁器・漆器、人形・こけし、和紙・文具、さらに仏壇・仏具など、約100コーナーの展示があり、賑わいと華やかさがあった。

伝統的工芸品は、経済産業大臣が指定したもので、次の条件に合致したものであるという。

❖主として日常生活に使われるもの❖主要工程が手作りであること❖100年以上前から続いている技術・技法で作られたもの❖100年以上前から使われている原材料で作られるもの❖産地がある程度の規模を保っていること

▼展示者にインタビュー

展示会場で職人や組合代表者にインタビューした。

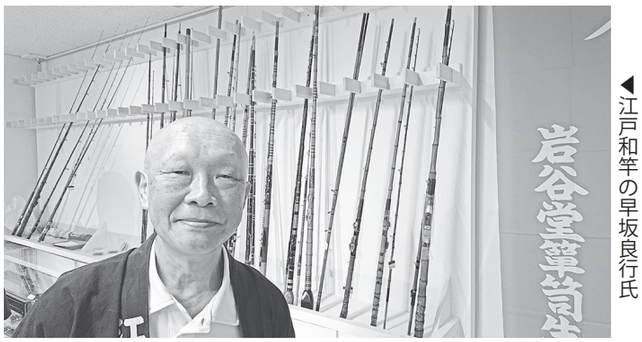
最初に伺ったのが、筆者の好きな「風神・雷神」の扇子(檜扇)を出展した京扇子の伝統工芸士・大村豪氏。俵谷宗達の図柄を扇子に描いた。これは、残念ながら庶民の日用品ではなく、儀式用である。宮中祭事の大嘗祭でも新皇后が持たれたようなもの。20万円の作品であるという。

▶京扇子の大村豪氏

次に伺ったのが奈良墨の野田盛弘氏。小学生の時からお世話になっている(株)呉竹の顧問である。墨の製造工程を説明して頂いた。古来より伝わる製法には、職工の手作業の技が隠されている。1000年以上の歴史があり、誇りが満ちている。文具コーナーでは雄勝硯や越中和紙も訪ねた。

◀奈良墨の野田盛弘氏

竹工品では、横浜に在住の江戸和竿組合員の早坂良行氏と意見交換した。江戸和竿は、200年の歴史があるというが、後継者不足であり、また素材の竹の入手も困難であるという。節と節の間が詰まった竹が、竿の握り部分に使われるが、そうした竹は密集した竹林では得られず、太陽の光が差し込む広い竹林が必要であるという。伝統は、技だけでなく自然環境も条件となる。



◀江戸和竿の早坂良行氏

ほかに、八女福島仏壇、山中漆器、堺打刃物、薩摩糸びな、伊賀くみひも等々も取材した。

▶置賜紬の作家、斎藤正文氏

最後の写真は、置賜紬(つむぎ)で、山形県の米沢、長井、白鷹に生まれた高度な染めと織りの技法が、若き職人に後継されている。作品を見ると、色合いと色調、そしてテクスチャーの素晴らしさを感じる。モダンで短い時間での伝統工芸品の視察であったが、現地を訪ね作業の工程や現場を見て、あるいは体験したいと思った。また、インバンド対応には、日本人自身が「体験する、交流する、学ぶ」からなる「新るるぶ」が必要であるとも思った。

▼自然素材の伝統工芸品が地球温暖化防止に貢献

京扇子の大村氏は、「京都、地球温暖化防止伝統工芸プロジェクト」(https://www.kyofuan.com/eco)を主宰している。それは、人工物の利用で環境負荷を与えるのではなく、自然素材を用いた伝統工芸品が地球温暖化防止に貢献するという回帰プロジェクトである。これは、筆者のいう「自然から至然」(本紙、第96号9面2018年1月22日発行)と一致し、応援したい。